

新訓集

比之部

廿五

津田文庫

文庫 1

1604

22



早稲田大学
図書館蔵書

倭訓栞前編二十五

洞津 谷川士清 纂

比の部

ひ 日とらひ明くまはまきと自然まがらひ初め一語なり日出の
 大さ富士山の如く寅時より深紅なる土佐南海北眺望志別鳥羽の漂船の
 規一所も同一大まくえ申る地水の陰氣と含める故なり出る時ハ遠一
 地より十七萬里日中の近一地より十五萬六千五百里なりとらひ○清和
 實録二日初出白无光月初出赤如丹とらひ慶長十九年春
 朝日如銅と神君の年譜とええ寛文二年三月数日の間月色の如く光
 ふらひ一正徳四年三月十七日より十九日まじ朝暮日色血の如く光
 ふらひ月も亦銅鏡の如く赤く光ふらひ○靈と神代紀よりあり天地の
 間日ほく靈ふらひとらひ○天と日ともらひ天皇とらひ
 とらひ後世天の下とらひ言成日の下とらひ類也又天とらひ日と

倭訓栞 卷之二十五

つた文庫

010190596872

△ひあし 晴蛉日記源氏物語の日の向と見えたり楊用脩の書に諺
語に日脚射空金楼直とあり

ひあし 俗語也日間の氷室乃意より氷間乃氷より復薄氷乃
意あり○香具より火の味乃氷

△ひらつ 秀とより日出乃氷の一説は秀とほもよりの穂出乃氷と
らり靈異記にひらつとあり

ひらつ 氷池乃氷の氷室は同一とあり○氷池祭とあり氷乃氷の
年の凶年なるをとり新しき延喜式より見えたり○生火とあり
官人あり

△ひらつ 日本紀に日向とあり和名抄にひむがも見えたり朝日直刺
夕日日照國なるも紀に見えたり凡そ神代に皆日向の國は都志
半の景行天皇も行宮の高屋宮とあり○神代紀に筑紫日向小戸橋
之橋原と見えたり日向乃名初て出たりとあり此事蹟筑前とあり日
向の松平氏貝原氏等の説より見えたり日向と丸國乃

惣名なりとあり今文意詳考をた日向の小戸の橋之橋原と對
り日向と橋と所謂枕詞也日向と日向と向とあり所とあり也一國乃名より
風神祭祝詞に吾宮者朝日乃日向處とあり
万葉集に八十一隣之宮日向と見えたり岳仁紀にも將軍の網田と美
称にも倭日向武日向とあり此考一通證は漏れぬとあり
○大同類聚方に日向藥高千穂藥とあり大伴宿禰家守
傳之卷焉と見えたり○ひらつはひの文菊なり江戸にひらつ大和
加賀にひらつあり

ひらつ 日本紀倭名抄に燧とあり火成撃出とあり具なり靈異記に燧
とありびと訓す新撰字鏡に磬とあり石とあり今諸國に産す
本字より玉火石なり伊勢度會郡乃村名に火打石あり○旅立人
に火打と贈る歌集に多く見えたり日本武尊乃故事に起まり古
事景行記にあり○燧乃推現と清瀧乃神祠とあり○兼好法師
伊賀國種生庄園見山は菴と結ひ比淨辨筑紫へまらつとあり

うち成贈る

うち成贈る... 道のり... 思ひ...

此火打石菴乃山あり奇石也俗に膏藥石と云ふ○東鑑に奥州比内
郡と申和名抄に又之は火打乃城に越前燧山あり北陸第一乃要害
木曾義仲乃築く取とらふ○火打金と火鎌又火刀と云えり○
燧杵古事記に見ゆも火うちなる○熱田より火打あり

ひうちぬらう 古事記日本武尊乃より出たり今猶宝劔此物とつけり
かやうして腰刀燧袋とつくは是なり宋朝乃制るも武官五品以上の佩
刀火石袋なりと帶せりなり郭思岳論に又えたり新千載集に親盛が
物乃使しり住に金乃火うちほくそと沈と... 指乃袋と云え
舞樂益圖採葉老乃舞乃出立もさげが火打袋とゆひけり太平記
にも較かけり白太刀は虎皮乃火打袋と云げと云えり四十日後に
けり... 太平記に青砥丸衛門夜に入し出仕まりかよつ燧袋なり

入し持つて銭と十文ありと云うて滑川へ落しりると云えり今この
巾着ハ此遺制なりと知へ

△ひえ 新撰字鏡に釋と云う微寒乃物なり性乃冷は氣なるへ
或ハ振在の氣より及ひ風よ何より... 易き成らふも云
又ひえまけり狗尾州なり新六帖に

穂よ出る復田より... ひえ草れひと接らして世や過らん

一説にひえの稗子もひえの稗なり... ○釋嶋と振州尾州にあ
り○日吉とひえも... 往吉とすとのえりか如く舊事記に日枝
懐風藻に裨叡山と云えて麻田連陽春の他と云えり傳教より前
此山を開き... 東鑑に金子山と云ふ三代実録に大比叡神小
比叡神と云ふ大嶽成大ひえと云ふ西塔と横川の間に小ひえと云ふ
扶桑明月集に崇神天皇元年甲申近江國滋賀郡小比叡東山金大
巖傍天降矣と云ふ今山王と呼ハ天台山乃地主乃金毘羅神と山王
と称せりとも傳教大師延暦寺と建し後七社と比しりとも名く

たりの佛祖統紀道遠傳附録日本國最澄遠來求法泛舟東還指
山為天台創一刹為傳教と又申日枝乃坂下福成明神乃社あり是
傳教大師入唐乃時の從者と申福成といふ者あり一入唐の時天
台山拜巡乃踏引乃一紙よる也○新日吉の大佛妙法院乃南より
應保元年と新熊野と同時と祭る事公事根源より申○比叡尾山
の撰津河邊郡杉生柏原二村乃上方あり

△ひを

氷魚と書り新撰字鏡と龜とよむ和名鮫と鮎試訓せり宇
治谷上たより乃乎よより延喜式と山城近江國氷魚細代各一處其
氷魚始九月迄十二月三十日貢之と云えり氷魚字初字記と云えり
王起賦よも感於候同上氷之魚と云り東俗ハ云りしも
○今北湖より出仕者ハ白魚よかりハ別種よや○水原と鹿下譜
よ氷魚ハ紅葉と云と云えり

細代本ハ紅葉と記せしむと錦河のふを記しと云れ

ひをむ一 和名抄と蜻とよめり朝と生と云と死すと云と治

川乃河よりハ物ハとらふむと云りハ水魚虫と名けり
や源氏橋姫乃卷よもひをむと云りハ骨を細流と蜻
蛸也といふ郭璞の詩よ借問蜻蛚草知龜鶴年といふ意なる
本州時珍の説も云り

ひをりけり 古今集伊勢物語なりと云えり真名本と射禮日と填り
引折乃日乃氣也といふ五月六日右近乃手番此日紅の下袴織物の指
貫よりいひけりハと扱て福の氣と前よはし引折て扱むといふ也
といふ一説よひをりハ標と二字ナリ一貞規儀式延喜式ナリハ騎射の式
よハ蜻のいひハ競馬の時必標と蜻と二つあり云りハ馬場の標蜻
の口と云りハ競馬乃日け名と云りハ標とひと云る標位と云
ぬといふ如く蜻といはるハ訓ハ万葉集ハ馬標とまじりといふ類なる
標と蜻といハ其形異なりハ馬を防て溢せしむハ意ハ同一よりて
蜻ともいふといふ疑なりといふ標位といふハ音なり○
為家ハ乃説ハ歌道乃大なりといふ一天下乃大なりといふといふ

くし詞ニ録くれ系なり神社啓蒙ニ櫻葉神明宮在洛陽朱雀東近衛西所祭天照大神也此宮上古在古近馬場五月荒手番之時大陽光華降下馬場之頭也故世人称云日降神明くるえり折と降と音近ととて此説あり

△ひかり 光とあり日明は乃系なり(一)歌ニ景色乃かまよふあはれもの多し漢も光景しつりて我乃体よりてひかりとわけしつり合ふらるなり

ひがし 東とあり日頭の系也とあり又ひんがしともあり日向ひしれ系なり(一)もつり一説よひがしと書てしんがしとよむと習ひしんがしとかくらへしつり(一)東山ハ平安京の東山也將軍義政次東山殿といひ藤原實熙と東山左府と称すは是也左府乃著す所拾芥抄名目抄等あり

ひがさ 万葉集ニ日方吹とあり申西乃風然し不假使よてもあつらつら日の空よ吹と船人の語もひがさとのよひまらつらとふ晩よ其方より吹ひ強

その形かすもすくもほどよかありはよもあはれとあり(一)休園とよむも干瀉の系潮汐乃干とる跡とあり歌よ志ほひのくもよあり津守氏乃歌よ

朝あけのひくも然けくまは山浦吹風よつる白雪

此ひとあり二系を兼より湖水よひくもいんたつ塩津山の東のわくをれく二系ともてめつとくよみ出せるなり(一)

ひがし 日次とあり日明乃系なり(一)睽眼とあり枕語乃實伽羅也とありりまも新撰字鏡ニ眺とあり訓すまらハ助語とあり(一)小鳥乃名もあらそ其眼乃睽とありとて也睽鵠也とあり鵠字とよめは心持かこ

ひがし 源氏ニ十六日ひがし乃とありあまも又ひがし乃とありもえり諸説佛語と引とあり附會多し大般若經ニ即便前進得到彼岸とあり我邦上代ニ般若波羅密會行りし生死と彼岸と一涅槃と彼岸と一波羅密と到彼岸と翻すとあり彼岸會とありこれ七日の佛事日本よのり行りし西土天空とあり事成り一砥平石録よる春秋ニ中

昼夜過不及なり。母と時正とらふ日本後紀の國分僧の春秋二、中月別七日存心金剛般若經を轉讀せしむるよしあり。新古今集よ

今もく入見入てとむるひあはれは院の内國の夕暮れ空

日没觀乃意をたれし二、中乃入日暮るけく日光乃赫変ずれ觀て知ぬ也。夫木集よ

りふあはまの半は朝日やまきり西の方のりも

○彼岸字と稱すは山まはりくれく比とてま名く○四國辺の體と

かへ 控字乃意也詔旨別錄よ唐改軍中書舍人掌詔語皆寫而本一為

底一為宜しとえたり大明會典よ底薄とてふまひく乃帳也ま底本

も呼り

ひがく 十字文よ陞とより庇陰とらふ日隱の系物よひがくは間と

もろも今しふとく○醫とてうくは同系たり類篇よ醫は陰也

ひがく 加茂あひとらふ日御蔭の系あり新古今集よ

あまの朝丹里の日の草豊のあまの成へ

是日ひがくのつは括くよめる成へ○藏玉集よ天河原の苗代と

ひがく

公賢家集よ

この文の雪と風とていつくまのひるがの時のか

李部王記よ深夜讀書愛光栢中右記よ中殿光栢用深草物と見えし日の燈蓋はらふ成へ

ひがくのかつ 延喜式よ日蔭髪とてえたり古事記よ天之日影とらひ神

代紀よ以蘿為手織とらひ松蘿一名女羅是とらひ別種あり

今狐乃成かせし物是とらひ石松之新拾遺集よ玉ふけとあり

大嘗會よ用かさせし式よくりと出たり今白糸青糸とて組

く冠乃左右よ岳とせし其表物たりとらひひがくの組ひが

乃糸とてえたりと盤戸よ神乃とてせたまひし時ふとて日

影さし出んと言壽くたす... 乃歌よ

諸人乃かかひうけの心業... 道よかれへる泳後一

△ひびき 持風... 氷椽... 木のかう... 一云へる也

ひびき 墓目... せし音也... 目よ似... 一車多... 竹根墓目

ひびき

ひびき 續紀... 将成... 鏡よ攜と

ひびき 衾又... 一山邊... 戸引手

ひびき 延喜式... 鏡よ紋... 知ます由

ひびき 口裏... 一茶もた... 一也河海

も也といふ雲岡抄にも茶二引茶くも由施煎茶也といふ二條按改記
も茶の昔より大やけのこくれ 給物よく侍まゝ大内にも茶園たし
侍るももも海人藻芥の上 古大内は挽茶の節會あり其後嚴也葉上
僧正入唐乃時重る茶乃種と得る明惠上人是と玩了りよく茶の梅尾
と本とするよりいつ筑前州背振山に植る岩上茶く号するの葉上僧正
乃時也夷客國師乃詩を行到茶山監眼開といふも梅尾と指り宋人茶
詩は幸得梅山信初嘗日本茶くも春雨鉄茶乃歌よ

くりらるる雨ふぬちつておけ梅尾山乃春乃若多

唐の茶飲は先春抽出黄金芽くもる葉上僧正の葉西也入宋乃時茶
乃製と詳しつ喫茶養生記と撰り實朝公は進り又明惠はわくま
其茶子と盛りし壺今も寺門にあり俗は漢乃小柿くもる
乃初の類聚國史は弘仁六年令畿内並近江丹波播磨美濃國殖茶毎年
献之くも行幸滋賀韓崎梵刹寺大僧都永忠煎茶献之くもる
此く伊豆山中は自然生乃者多一本邦古より是あつて人知れくも

いりさんと神代は其名と聞きくもくも神供は用か例もあつた
都良香鉄子銘は多煮茶茗飲味如何と書り惟宗孝言茶賛あり後
朱雀帝の時より盛に説くもくも西土の群書備考は茶之名始見
於王褒僮約盛於陸羽茶經而其稅則自唐始也といふ朝朝鮮ハ唐大
和二年は茶子と得るより東國通鑑はるえり○埃囊抄は十服茶記
録と引其法と詳し書せり回茶の顔回貢茶の子貢一と聞て十と知一
と聞て二と知乃茶を取といふ○婚礼納聘の時茶と副る事あり
天中記は聘婦必以茶為礼儀九種茶樹必下子移種則不復生よ
とらり○職人歌合は茶をたて賣との名目は一ふく一錢といふ海
東諸國記は人喜喫茶路傍置茶店賣茶行人投一文飲一碗といふ
○今西土も煎茶のくも明僧千呆乃話也といふ西土も始は龍團餅
茶あり我邦は是と用ひて未茶のくも用り○海人藻芥は建蓋茶
一服入る湯を半むかり入る茶筍よてたつ時たふさく湯乃音の
聞るはたつて頭弁上人といふ○宇治茶は初昔

後昔伊昔等乃号あり三月節後世一日め茶芽と摘成例と成世一日と合
世の昔字也よく名とすといふ近き代の御製と

世れら茶のつ志のふりての地より後の昔と

又別儀といふ名目の珠光の松花乃清香と茶とつめきし真壺のまろ持
過く茶とて故と蒸と少しよきせしより珠光乃別儀といふなり○
鳥嵐同穴集の後鳥羽院乃御宇明恵上人茶乃實と宇治と柘尾と植とい
つ一説は將軍足利義滿公大内氏に命し宇治と植しめらせしより
始るといふと丹波國上林郷より居とて移せるといふ○茶湯とい
ふもの天龍寺乃開山梵窓筑前崇福寺乃開山南浦入宋乃時持来り
基子と得く其式と定めし僧寺此行儀多しとかやこれ録舎此條
乃末年より起り高時千又箭乃城と攻しむふ兵士百服茶湯とて遊
興せしより及佐々木高氏宅中七所設七番茶賭物七百名本非茶七十椀以
請義詮又与衆六十三人遊為茶會と太平記よえより百服茶の今も
濃茶也又薄茶あり足利將軍義政公に至り上下盛とて豊太閤と及く

北野の茶會は茶家者流乃集る三百五十餘人より後天下は偏しとい
り○宇治人乃説は茶と採く製する間濃茶と呼く白と稀茶と呼
く昔といふ収蔵乃後の濃茶と呼く袋茶といふ稀茶と呼く詰茶といふ
とて又脩治し七品と分ち定む曰鷹爪曰柳葉曰淺黄葉曰薄葉曰金葉曰骨
曰鶯尾也といふ○舶来乃者と唐茶といふ又阿蘭陀茶あり茗の茶乃晚く
取也櫃の苦茶也といふ一種乃生木江戸種藝家あり葉大と厚と異は此
葉蘆也といふ○雜纂に對花吸茶試殺風景と入より日光乃はたりのり
と茶と代く用るといふ

古事記は袴といふ倭名故同一引帶乃茶束帯とあり水細
記よ

官府より解由乃意也年貢と納むは百姓乃内の番と
あつるは解戸といふ納めくは解庫也○神代紀は界といふり
界繩といふ又冒法といふ絡繩といふ○口語といふ交割乃義也
ひきぬるせ 檀紙といふ男女乃志を通りと艶書といふ紙と用わしより

名くといへり西土乃書_一松皮紙_一と云えり○東海一漚集_一の繭紙謂之引合と云えり繭紙ハ唐書_一日本國使者真人興能善書其紙似繭而澤人莫識_一と云えり初字記_一は良人以繭と云えり一説_一は今乃奉書紙也といへり

ひこでこの 江次第_一遣曳出物馬_二匹并送物_一と云え北山抄大饗乃條よも奉出物_一馬鷹あり名義知ぬ_一十訓抄_一は公任卿小野乃大臣殿とむ_一と云り一時朗詠上下卷と云_一ひこ置物乃厨子よかせ_一りけるゆ_一と云_一引出物_一と云_一と云_一と云_一○誓礼_一の馬_一ひこてもひこ部類鈔_一正和五年新院為花御覺御章圓通寺_一為御引出物獻_一鷹眼一万匹と云え東鑑_一も處々其義云えり庭訓往来_一も引手物_一と云る

△ひこ 引牽抽掣_一たことよあり日往乃義_一や○瑟琴_一も鼓又彈と訓せり_一と云_一長くす意_一よ_一と云_一○綿とひこ_一横綿_一と云_一り○草とひこ_一又とひこ_一ふとも抽_一字掣_一字乃意也○裾とひこ_一曳字也漢雜陽傳_一不

可曳長裾_一乎と云えり○印とひこ_一牽轉乃義_一磨と云_一り○樓字と云_一り踰東家牆_一樓其處_一予乃類也○新撰字鏡_一根とひこ_一と云_一り○衆_一物と給_一とも_一り人の心とひこ_一と云_一り物_一輕重とひこ_一と云_一りも_一り_一關_一とひこ_一と云_一り_一湯_一とひこ_一と云_一り_一辭_一も落_一く_一や物語_一よ_一と云_一り○算_一よ_一と云_一り_一准_一字と譯_一せり_一ひこ_一と云_一り_一引_一津_一の筑前_一あり

ひこ 繩_一と云_一り_一銅_一山_一ふと_一用_一る_一是也○北_一丘_一の律僧と云_一り○耳_一とみ_一り_一ひこ_一と云_一り

ひこ乃やは乃 俗諺也祇園會_一山ほ_一とあり山ほ_一と云_一り出_一町_一は_一技_一町_一あり_一り_一年_一貢_一と云_一り_一佳_一例_一は_一其_一日_一は_一い_一り_一て_一持_一參_一す_一其_一時_一酒_一と云_一り_一甚_一急_一か_一り_一す_一の_一ん_一ま_一り_一乃_一ひ_一こ_一乃_一山_一乃_一と云_一り_一○寄_一抄_一恋_一李_一吟

△ひけ 俗_一ひ_一け_一と云_一り_一も_一ひ_一け_一と云_一り_一も_一軍_一乃_一驅_一引_一より_一出_一る_一詞_一あり_一

又比奥乃音轉ありともいふ

ひげ 倭名抄ニ鬚^シ成かゝつひげ鬚^シ成^シたりつひげとあり鬚^シ毛^シ乃^シ美^シ之^シ
といふ全浙兵制ニ三了鬚とひげと譯せり又鬚^シへう^シひげ鬚^シあり
ひげ鬚^シの類ひけといふ○鬚と利^シ東照宮乃時より此事といふ
豊太閤の像ニ長須あり加藤清正美鬚乃名あり大猷院公類鬚を
利^シ今乃風俗といふ○俗諺ニ諂諛^シ乃者とおひけり塵^シと取^シいふ
ハ事文類聚ニ丁晋公魏^シ萊^シ公^シ會^シ食^シせ^シニ美魏^シ萊^シ公^シ乃鬚^シと深
いと丁晋公起^シく排^シふ^シと見えたり

ひげらかき

人^シの街^シとらふ俗語也てらぬも照^シ及^シふ^シと見えたりかとも
ふ^シなり

△ひこ 彦字とよめる古事記ニ日子^シと填^シり男子乃美称也韻會ニ彦常
也美也といふ古事記ニ豊玉姫の白其日子言^シと河^シふも彦火^シ出^シ見^シ尊
かう^シ夫^シとらふ如^シ又比古達^シといふ彦父乃美也今世乃俗^シ其^シ夫^シと
かや^シら^シらふ如^シ○日本紀倭名抄ふ^シと孫^シ成^シり^シひ^シと通^シと重^シなり

子といふ意もや今俗曾孫といふ○喉^シひこ^シといふひこも乃略^シや○衣
よらふ孫より出^シるもや○彦島も長門國也

ひこぐえ 倭名抄ニ藥とよむ書ニ由藥^シといふ孫生^シ乃美^シなり新撰字
鏡ニ稗^シとよむ美とひこぐえといふり童蒙頌韻ニ換^シと作^シる

と渡せぬ田のひつらひこぐえてやとわとよ成^シりる

ひこづらふ 古事記乃歌^シもろも萬葉集^シもろり文選^シニ紛^シ撃^シとよありひ
こづらふとあり今ひこづらふとありかつひも詞^シ同^シ源氏^シもろも志
らひ又ひこづらひといふも同語なり

△ひご 膝^シとらふ引^シかき^シの美^シなり○物^シよ小^シ膝^シとらふ事^シ見えたり○
佛者乃右膝^シ着^シ地^シ胡^シ法^シとらふは樂^シ記^シニ卧^シ坐^シ致^シ右^シとあり三代^シも亦^シ此
礼^シありと濟^シ北^シ集^シもろも○倭名抄ニ膝^シ前^シとひご^シなりかりとよあり今
ひご^シといふ○豊州^シもろもつと薩州^シもろもつと南部^シもろもつと
さか^シふ^シ哉^シ後^シも武射^シか^シぬとらふ
ひご^シとありひご^シもひご^シもろもろ神代直指抄^シニ日去^シ乃^シ美^シと

らる靈異記の淹とよあり出羽とていひや〜らる華嚴經維摩經より如
とん申この幾時とらふよ同〜○関西関東の口語よりらるやつ〜い
ひ又志つ〜らふ出羽よりらるは〜らる世道乃意ある〜○物に庇とも
らる日指のふら〜内日指とわらふとらる廂も同〜清齊位置に倭漆
經廂〜もるも金葉集の逢事乃ふ〜はぬらふはやめま〜のふら二
意と兼〜る新撰字鏡の髪とひ〜〜の屋翼也と注せり又宋成屋乃
ひ〜〜のふら〜の閑情寓寄の活摺とらる○関西の尾曲
〜らる越後よが〜らる

ひさげ 松草紙のひさげ乃え〜るも資暇録の偏提とらる拾遺記より
和間謂之注子仇子良悪同邦注名去柄安繫名偏提〜らる神宮雜例
集の授と記せり海人藻芥の授の右の手と〜り持つ尤乃手と寄〜え
〜らる
ひさ〜 鬻とよあり販も同〜提賣乃ふ〜○ひさ〜人ひさ〜めい倭
名致の裨販販婦とよあり販のやすく買てた〜賣とらる

ひさめ 日本紀和名鈔の雨水とよあり字乃如〜又大雨とよ〜る万葉集の
霏霖とよあり和名鈔の霏の大雨とよ〜る日本紀の一處大雨とらる和名
鈔の引とせ〜大雨乃誤寫とらる〜世俗の火の雨と心得〜も是也即康
節の氷雨の霖火雨の滴とらる〜別とらる〜○販婦とひさ〜め〜らる略
〜ひさめ〜らる又轉〜てひさ〜め〜らる〜埃囊扱とらる
販婦の周禮よ見ゆ

ひさかた 天乃枕辞より又空〜も日〜も月〜も星〜も雲〜も雨〜も鳥
け〜らる或は都〜もつ〜け〜らる天都の意ある〜鐘〜もつ〜け〜らる
天鏡乃ふら〜又た〜ひさ〜らる〜の〜らる〜空乃る月乃事〜らる
〜歌も〜らる〜久〜らる〜の〜らる〜春乃日〜らる〜らる万葉集の
久方又久堅の作〜らる天先成とあ〜らる久方〜らる漢各乃注の湯
〜天体堅清之状〜らる〜らる續日本後記乃長歌の飄葛と書〜らる訓
と假〜らる〜の〜らる〜らる〜器用陶甒以象天地之性也〜らる〜らる
の義も據あり〜らる

ひごまろく 跪とよめり膝曲衝乃み之文武紀に傳百官跪伏之禮とよ
みええ紀略に早達貴而跪等不論男女一依唐法と私仁乃詔よえ
たり○高ひごまろくさくさくさく枕草紙よええより長跪あり○王
世貞り坐行と解し古入膝坐故也とらふと跪し膝こそ歩
進むとらふ

ひさごいふ 日本紀に東髪於額とかくりめり執花乃形と状まるなるへ
額に開く花形たしめ折しけつゆふ之又鷹ふちよ種々いふ
とも一す或は五分と皆執花よとらふ

こい左のりかひつけ右もゆふはとつるし就ていふ
菱子と訓せり疾藜もよめり鱧薺乃みふるしひ菱とも

らつり菱よ兩種あり小なるは黒菱といふ稜硬し人刺れ大なるは
稜脆し參河國岩堀乃菱に二稜といふ○綾の紋よ幸菱あり二
重菱又三重たす中菱ともも正中飾記よ倭衣裳乃らふと紺地文

菱ともえり又武田菱に割菱也元祖新羅三郎義光よ事
起る又折入菱あり入子菱花菱立菱横菱一菱重菱速菱四つ菱あり幕
の紋よ松皮菱といふとらふ○ひし餅にかきとらひよ産もの也菱
花鏡に据るとやひし餅とひし花くらとらふ○軍用よらふと通鑑よ
鉄菱とえり○和名鈔よ管と訓せり魚と取乃具之三稜は菱の
如くある伊勢よ川に穴をほりて上よ柴と覆ひて魚と集むとらへ
りこれさふしつける○同書よ又と訓せり征戰乃具之明律よ魚又
禾又あり魚とつと稻とつとひし○隼人乃俗よ海中乃洲とひ
しとらふ大隅國風土記よええより千洲乃薄とらふ○萬葉集よ
ひしと鳴とらひ源氏よひしと聞とらひ鳴音也○著聞集
よ馬車ひしと立とらひ古事談よひふとひしとらひ徒然
草よ心よふしとかけて俗よひしと頼むふとらひひしと意あり
緊字をよめり又靡持乃字彼是乃字ふと用るに穩なり或は必之或は
必至或は必死の意とあり

ひじり 日本紀に聖字とよめる万葉集に日知とかけり日徳と知しめ
 と聖天子乃稱之又大人とよめる西土にも天子と聖とをいふ我邦
 日知乃意も西土と異なり天の日嗣志なりめと皇孫乃尊と申奉る之
 ○聖神ハ古事記舊事記にも和泉國和泉郡聖神社所祭乃神是也
 三代實録に貞觀元年和泉國聖神列於官社為從立位下と云えり信
 太山より○万葉集に酒乃名とひしりといふもいふは魏乃徐選
 故事に醉客謂清者為聖人濁者為賢人といえり○物語にも云えり
 とも名遠乃僧とせり今世にて其真似とする者乃通稱と云ふり
 ○源氏に俗ひありといふは東坡山谷も自ら首髪乃僧在家乃僧と
 詩に作る意も高懸ひしりも信西乃末子按察使乃君より起せり
 といふ名利乃衲子乃稱と云ふもいふや
 ひしけ 日本紀に天陰とよめる日乃あけり
 ひしりぬ 林氏説に物乃ひすといふ也といふ又基乃聖目と訓すかきも
 心乃徒然叫ぶと云ふ

ひじりぬ 孟子に孔子ハ聖乃時ある者之と見えり年中行事歌合

秋奠

かき人のいふはみみかきと云ひしは時よりかきと云ふ

△ひす 飛龍と書り今漢渡乃物あり

ひじり 神代紀に日隅宮あり俗に物乃云すといふ此云のり或ハ飛

墨と書り一説に日隅も大己貴神乃ひとすり乃と云と申事と云と云

去も云とすといふ

ひすとも 倭名鈔に鹿尾菜とよめる天長中ニ停太宰府貢鹿尾脯とあり

も是なる一漳州府志に羊栖菜也といふ伊勢物語に云ふと云と云

るえり今志に干杉は藻乃云ふ一伊勢物語に歌よと云と云清

濁もかよふといふ一是は送るといふ一かきぬといふ一詞賦設り料ふ

き也万葉集に高安王の襲る鮎と娘子に贈る如く角のりといふ

土九人ハ衾りといふ○古本に綿裳と昏一本に袖とありと云と云

と誤りといふ談字あり一和名鈔座卧部に談毛席以立色絲為之と云

賦役令よと毛と織るもの貢る事ゆき古の用ぬらり
ひすまゝ 五節乃下部より類聚雜要に種洗と書り物語にひすまゝ
りひひすまゝやくと乃ふとるえたり然るめかふと乃類ふれ乾清
乃名ふて一ほり及ひて女工の賤業ととく名目よよるもやまふたり
すはしとらり

ひすかしま 監字とよめり日本紀に復とくすかしまとよみ恨といすか
とより皆同系に俗ひととらふ此系ある一苳菊乃名とらふとい
か侍らんといさかしま乃まね如いつけらる詞也○新撰字鏡に斯
とひすまゝとよめり

△ひせ 新撰字鏡に嶋とよめり字訓とよ心得かき○琉球よと八重
十瀬とらふ所あり海中の破礁南北五里よわとらり

ひぜん 肥前乃國の倭名抄よひ乃とらけくとよめり今音とゆくと
ととい火國の松島あり肥後のひのとられとらとよめり○疥とひぜんと
らふも肥癩とらふ一又南蠻の邪法肥前嶋原よ起りく其宗人の依托

一征夫の依托とと世よ周く流布せりよと肥前瘡と呼らる是と
亦疫瘍なり

△ひそ 倭名鈔造作具に檜楚とらえたり細木と名く延喜式よ以檜竿
為天井とらゆとと及ら

ひそろ 日本紀に陰字とよめり日底乃名ふる一隱密乃意にひそや
うとらりつる潜字も同一私字竊字に多く謙辭よ用わたり靈異
記に諱又偷とよと異嘿とひそらうとてとら也○新撰字鏡よ
睽とひそらうとらり

ひそむ 擗字とよめりひそらうとら轉せらる一眉ふとらり半先て
口のそげむとららり嘔字也○聲とひそむと悄聲と見ゆ

ひそく 源氏よひそくやとらりこれ物とらるる秘色也青磁の器
物とらるる李部王記云天曆五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色
宋葉實々筆衡よ近世不貴金玉而貴銅瓷遂有秘色瓷器乃錢氏有國日
越州燒進臣庶不得用故云秘色とらる○衣の色とらり瑠璃色

△ひく 日本紀の常字頓字ナリ訓セリ日五の義ナリ又直字と
 もよあり○俗語乃ひくくも頓の義ヤつりくも同く又
 ひくものもひく○歌よ山田乃ひくナリも引板乃義ナリも
 らう新勅撰集よ秋田とひくく乃ほりくもえくも心得くも
 乗集よ客乃廬とええく地たひも遠く處乃田とひく○楮麻と怖す
 流落る水只板とひく、水とせまかくも動く揺ちく鳴こく甚く響
 く高く西土よ水牌とひく以板激水以鼓之田間防禽獸之器也宛委餘
 篇よええく○姓よ日田乃東鑑よも

ひぐ 衣裳乃摺疊と襷積とく是くはひぐ乃略よ和名鈔よひぐめ
 訓セリめ縫めふくくくく新撰字鏡よ鼓も訓セリ又絹とよひ
 ぐくもあり○飛彈乃國乃名も國体乃衣乃ひぐよ似く山深く澗峻く
 く釣折籠渡ふく乃名あり後漢書よ跋涉懸度とく如く師古註よ懸
 度ハ懸繩而度也とく又○姓氏録よ城田とくもひぐもええく

ひぐ 鶴林玉露よ錢薄悪者曰慳錢とくええく鏹造り字ハ城文も訓
 也ひぐくくく階書よ除其内郭とく意あり一應永十八年八月乃大風
 相州三崎よ唐船漂着セリ船中数万貫乃永樂錢ありて南東是と通
 用するも他錢よ同く將軍義持公乃時也其後北條氏康關八州を従一
 比永樂錢乃くを用わくも異朝代々乃古錢と悪錢とく悪錢ハ皆上方
 よ至りけはより鏹と京錢と名く最初く永樂一錢よ鏹四錢と充用
 慶長十一年より永樂と禁止セリ○修驗家よ結字と
 よあり

ひく 日本紀よ頓五とよあり字詩經よん
 ひぐり 尤とく南面すとく東よけとく日垂とく日乃天よ象
 を出く意へ○尤右とくく秩父とくト奥州よ鑿方榘方
 しん
 ひく 神代紀よ養字とよあり古事記よ日足と書り赤子と養育一成人
 とらうく神代紀よ子養又長養とくも日足とく成仁乃

字より〜ひ〜あ〜ひ〜とらやとらかひかひ心たり

倭名鈔と額神代紀と顧とよみり直日乃系日と向ハまらりらる處也○烏帽子〜もらり正統記と後東のこ〜もら烏帽子乃ひたひか〜云々也○鳥羽院乃比より出来〜と〜也○和名鈔と蔽髪とよみり額乃系と出〜り女乃具也平額居額乃別あり新古今と后と立たす時冷泉院乃后官御と〜ひと奉らせきま〜と〜え〜り東野州乃説と女房乃裝束乃時髪上〜〜かほひか〜りや〜と〜は〜の〜と〜ら岡部氏乃説と内宴乃様書〜は古〜繪と弄妓乃髪け〜は形と御食や〜り〜采女乃髪あげ〜〜ひ〜乃様〜のぬ〜ち〜大〜ひ〜〜て弄妓ハ寶髻と〜采女〜の訪せぬ〜雅亮ハ五節乃書法よ〜び〜ひす〜び〜ひ〜と〜と〜是〜と〜

日本記と緯とよみり靈異記と同じ今南都法相家のよ〜と遺せり

常陸とよみり〜と〜略之風土記と道路不隔江海と〜と〜

新古今集よ東路乃〜ち乃〜〜あるち帯とよみり○夜手乃〜と〜と〜つ〜の万葉集よ出〜風土記と國俗諺と筑波岳黑雲掛衣袖漬國と〜と〜

日本紀と傾宇永宇切宇ふ〜訓せり常經乃系〜次乃〜と〜と〜意同一

神代紀と永字とよみ常と只管と訓せる〜訓〜得〜と〜先輩と評せり常尚乃系〜俗と〜と〜と〜語録解系〜と〜只管ハ作而領得也〜と〜と〜と〜專辭と注又語助〜用〜樂只君子〜と〜是〜○後拾遺集よ〜と〜と〜袖哉〜と〜と〜

直岳と書り中右記台記と〜と〜見〜と〜の寢服と〜と〜女子乃服と〜と〜兵範記と故姬官御法事と記〜と〜織物直岳故宮御衣と〜と〜玉葉と撰政殿乃長女入内乃と〜と〜記〜と〜先着紅御直衣其上奉〜着御衾〜と〜と〜後撰集よ〜と〜と〜と〜

ひらりまへ 元前の衣衣服に就てらふ所謂衣社也續日本紀今右襟といふ本
又えとと我邦の古も知ぬ一今も蝦夷の俗に衣社也○俗に事の
自由ありきと喻へらふも習ひに背くべしとてなり

ひたひが 万葉集に額髪結ユル在しええら古事記に小碓命の事其御
髪結額也とええ日本紀二年十五六間東髪於額と又又新六帖に振つ心
をひら髪とてなり額髪ぬがけとも訓とてなり倭名鏡にええら

○源氏に尼の事とてひがとてさうらう書に昔にたを尼とて喝食カウシキかとの
柄に肩までかるといふもなり也

ひたひがめ 定額といふ也續日本紀に額字とてめとてなり小学陳注に
額猶數也といふ定額に寺家寺田といふ具てて格式ある寺と定額寺といふ
類也徒然州に諸寺の僧のいふもあはれ定額の女孺といふ事延喜式にええ
らうとて數とてまりたる公人乃通号とてなり

ひたひらひら 六月後詞にえ申大和の國の四方に真秀マホありとてめく譬へら也
今と日の中空のひら日高といふ也○日本紀に日高見國といええら都と

いふ也式に陸奥國桃生郡日高見神社又の鄙に都ありとてなり古事記に
天子の事天日高とあるを併看一○紀伊國日高郡と四方のひら高と
遠く故と私記にえら

△ひら 神代紀に塗字と訓ずり水土の義ありとてひらひらぬま也土字にえら
土形の類是也字は袖ひらて源氏にええらとてひらとてなり万葉集に所濕は
よめりひらとてれきたし又ち也とて漬字とてなり伊勢物語に浅くて
袖と漬らめとあるを万葉集に澤田川袖衝をり浅くとやとて拾遺集詞
書に松の海にひらうあるとててやと海にありとてひらとてなり松とてなり又ち
也○万葉集にひづらとて約めてひらとてなり多し○新撰字鏡倭名抄に肱
肘臂とてなり川かの義ありとてなり又うらて也なり又ひらへてと通と肘の臂節
也又祝詞に手肱テノウデとてなり又ゆめり

ひぢまき 和名鏡に釧とてなり臂纏也涅槃經に在臂上者名之為釧とて名
ひぢりこ 和名鏡に泥とてなり土粉の義に助語人一説にひぢりぬまなり
マノよと通なり

ひらがらみぞ 古語拾遺の眩巫今俗竈輪及米占也と見えたり女巫と云

△ひつ 万葉集の小竹櫃は志のひつと云々訓をかき置櫃は引かつた

系と倭名抄は俗は長櫃韓櫃折櫃小櫃等の名ありと云々式は明櫃あり

○古今集は袖ひつと云々後撰集は袖ひつと云々万葉集

は漬字温字はひつと云々也たも云々○ひつ川は山城紀伊郡本幡

の里近き小川也古人の詠せし山科川の宇治川入るのありと云々夫木集

日子のふの岡の屋と云々伏見の明てはひつ櫃川のこ

岡屋郷八宇治郡也○佛の符帯及みそと強と云々人名佛躬ふと是也

ひつド 末乃時の日乃西は旋るてくると云々宇治拾遺は午時過んつと云

る活と云々如し十二生宵乃内羊はと云々我國はふと云々のかたは

十二辰乃本訓なる金一尚齒會記はつと云々ひつと云々の初め

らるる羊蹄踏乃名はと云々枕詞は用ありと云々今度々海島は放ちの

食するふはね一殺はひつと云々瓶はひつと云々羔羊の子と云々○野牛と

称する物の綿羊と云々蜜種也是も海島は繁殖せりと云々○拾遺集は午

末どうされよりひつと云々櫃と造ると云々と辞案抄は

つと云々上野國多胡郡乃碑は即成給羊と云々は羊と給つと云々夫

羊太夫乃碑と称し其事實を傳つと云々と即成給羊と云々て羊ハ

養と通つた云々○養久記の武士は萬羊九郎秀頼は此氏はひつと

む金と云々公武栄枯物語は萬年は作と云々○日本記略は殺懸羊白

羊山羊と云々○浄海猷羊乃後人多疾はかゝる世羊疾と云々百

鍊抄は云々

ひつが 倭名抄は稽と云々自生稻と云々姓せう歌はひつがほと云々あり

又志と云々もすもえと云々稲と云々後よ干土より再生すと云々

ふと云々稲孫と云々易乃及生と云々あり根と云々非也肥前と云々

一年再熟乃稻ありて稲孫と民間乃食用と云々又此草と産帯乃中へ入

る事又産室乃片置は是と用と云々故実ありと云々尾州はひつと

越前はひつと云々

ひつが 日嗣と書り實位と云々奉るなり後水尾院御製

たのゝねやよその國と我國の神のさけとてさぬ日つとさ

今先帝御在世とて位と讓らせしゆと讓位と稱し崩御乃後急の位と繼せしゆと毀祚と稱し式正乃礼乃行りてと即位と稱し

○拾遺集の河本の濱のあまのひつぎとあるは日改乃貞也

棺とらふ倭名鈔のひととともいへる人木乃をちかろ檀弓の登木といふ
左傳の就木といふも棺窆といふも又附身曰棺とあるは人附りてをちかろ歎之也
ともいふものとともいふも○蓋棺事乃了の韓退之の語○死人乃棺中よ米
錢と入るの旅行乃意の儒非乃飯食ともいふ櫛と入る上古の遺風ふ
こゝろ○更乃名よひつとある又あつとあまんとする其奥子ハカトといふ
よら

ひつくり 俗の縁坐乃をちかろり引加るの轉訛とす

ひつごりみこ 日本紀の皇太子と訓せり日嗣よ立たまふ御子也又儲君ともい
ふは皇太子カチとす

へひで 秀字とよむは日出乃をちかろ英とよむも同し○牙杖よらふは日出乃をち

松檜ふとふら

ひでり 神代紀の早とよめり日照乃をちかろ○ひでり乃神の倭名鈔の早魁と訓

せり本草の文字指扇と引く早魁山鬼也所居之處天不雨とらふ又男魁女
魁とらふ

△ひと ひととらふ日與乃をちかろ一人の万物の靈をんて日と與ふ生々する意
味もや古姓の毗登あり續紀にも也○梅誕生云人在上則作人在傍則作
之在下則作之若蒙則均一雙二矣○仁とよむは仁の人也とらえらる○天
子此御諱と仁と通り名と成りしは後冷泉院より也○日本紀の他
とよめり方言よ呼人曰他とらえらる○俗語の自他と兼て人とらふ使
人愛むもの人よ同し○又倫とよめり人倫の義也○万葉集の鷹と遠津人
野公とらふ人とも源氏の琴波とらふ人とも猫とも人とも
らふともいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
代とらふも清盛と重盛と父子の間よて悪事と忠孝と分り義経と景
時と主従の間よて軍功と讒佞と傳街談途説兒女子よ至るまで口

碑より慎む一〇人きらさ心も去る乃歌らさる否也萬葉集より
とらふて不不知も書りよく此歌よの上よらと置く下よらと
うけらるる乃さくは乃た通つ九く此人乃心うらや土佐日記
と渚乃院よて

君さひく世どかく宿乃梅乃れ昔乃香と猶ほほひりれ

定家卿云貫之歌心くくけ及難一詞はよ姿おも去るさまは
好く餘情妖艶の体派このまんと此真乃風体よて意もてよ
もかろれよまかろ内よく雅あ巧派あかれ風調とくさる
物也古今集よ入る歌よ心派はけく吟味とく

ひらり 一とらふ日與つ乃天天地乃間日より尊とあはれ又人さ通つ
神代紀よも天地之中生二物状如葦牙とらる人乃始之口訣よ一者林曰
日於天地二也大載禮よ天一地二人三々而九八十一主日ソ数十故人十月而
生とらる〇尾州知多郡よひらりゆとらふとふとふとふとふとふとふとふとふと
五誤下野もひとふとふとらるよら所ある〇古今集一本の存よ

ひらり 一人をらふよ神代紀よ一身又孤獨をもよらひとらる乃略とらる

みたり乃例よと又ひらりもよらる言事記よ二口とふらるよと文述よ
顔とよら注よ獨也とる也又文よ獨自と連用する者多一〇器よらら
和名鈔よ薰爐と訓ヤウ火採乃外ハ木内ハ銅又陶よて上よ銅乃籠と
れほふ物之類聚雜要よ火取籠火取母乃圖及小火取乃圖あり香乃火とら
桐乃葉乃ら繪ありて乃文字く

桐の原とふら分くく成より必人と侍とれられや

とらふ故也と或記よええら

ひらり 日本紀よ間をよらる萬葉集よ人間とええら歌よよめら多
く人間乃人乃見ぬ間一〇一間乃兼もあり

ひらり 日本紀和名抄ホと圖とよらる人屋乃茶也抄よ囚獄司ひとやら
くさくさよら拾遺集よ人乃め侍ふ男乃ととや侍らる
志のひつるあそそら唐衣ひとやえんとい思はれけ

ひとづゝ 備とよめる人形之偶人も同一土偶人木偶人あり日本紀は藪靈
とくまひとづゝとよめる○夜具と人形あり侍中群要は画一刺内藏寮供
御人形事とる白源氏のみくく川近き心ちする人がくくも思ひやりと
又白歌日本紀の身代之身也といふ式は金人形又金銀塗人像といふ
くく祝詞式乃東文忌寸部献横刀時呪文は銀人といふ是也金人銀
刀といひぬ文乃略之又鉄人形あり又茅がや草乃人形たといふ類聚雜要
かといひ胡人形又○音くく人形といひ玩具小像乃然稱之土人形ハ泥塑
人也塑ハかといふ

ひとたま 人魄之本草とて白人益死則魄入於地隨即掘之状如鉄炭
もらう明月記は正治二年三月五日夜前北壺吳竹辺有入魂毛去とて
毛時と地より三四丈と過す落くく玉乃如く地下黄泉と入くく
或ハ落く所は黒色乃小虫多しといふ

ひとしほ 一人再入之紅く朗詠集より色より詞く猶一段く

ひととく 俗語く西土は環拱又連抱又一圍ふといふひとた人の略く
ひととく 神代紀は人民又民一字とよめるく種乃養なる古事記は
人草とんといふ
ひととく 日本紀は人別とよめる今音とてく字魏志よりく
人言乃養けり又人の口といふ夫木集

ひととく 世の中ハ形根と何く人の口や行まといふ
ひととく 和名鈔は一屯とよめる綿乃量ハ今義解ハ綿二竹曰屯といふ
拾芥抄は十二兩為屯といふ通鑑注ハ綿六兩為屯といふ
純は同一包束といふ

ひととく 伊勢神官は遷坐乃時ハ人垣あり倭式帳より○殉死ハ人垣の
名ハ古事記よりく字乃まて生死葬祭乃異あり
ひととく 人心人情といふく人心惟危といふと歌ハ人乃心といふたのま

唯在人情反覆間といふ諺ハ河中に立く人申ハ立くぬく意是く

ひとごめ 一拳は俗にオカハカとのことなり。伊勢多度神社に
嵯峨乃奥なる一こぶしといふ小祠乃称号なる。一伊勢多度神社に
も一拳乃明神と稱するあり。○拳字力の義あり。詩に「五拳」云々とあり
ひとごめ 潜又侍又伴とよみ。獨自乃義なり。自とよみ。万葉集
よるんしり

ひとごめ 神代紀に性字質性の字なり。訓せり。日く共よ成乃義常よ長と
もよみ。神武紀に「成入乃義」詩經の覃とよみ。一箋よ始能坐也とよみ
しり。靈異記に天骨とよみ。

ひとごめ 源氏に「長恨歌」一領とよみ。衣服よ就くしり。書に「
行とよみ」
ひとごめ 先乃物より人よたのめとよみ。意とよみ。幽齊座右よ人となり
しり。乃意なりとよみ。

ひとごめ 倭名抄に「髑髏」乃俗名とよみ。人頭乃義也。○三河設樂郡鳳來
寺修覆の時一尺餘の髑髏と堀出。しり。慶安二年乃しり。鎌倉乃深沢洪水

して崩裂多かり。時三尺とかり。髑髏と得。しり。齒乃大さ一寸八分なり。と
延寶三年乃事。阿波勝浦郡大原浦にて髑髏二ツと堀出。と頭乃ま
り。三尺七寸額より肥。して二尺四寸牙の長と。寸五分あり。と。録十五年
乃事。奥州三春。しり。九岩屋に在。髑髏ハ三尺齒ハ二寸骸骨三寸大と
しり。是皆防風氏乃類。

ひとごめ 倭名抄に大白神と訓。しり。新撰陰陽書に大将軍者大白之精
天之上。客とよみ。一日巡乃義成。しり。大白星也。しり。曆林問答に其居礎立柱
上棟修造。移徒嫁。聚塗。竈堀井築。垣出軍葬。埋起土百事。犯用之。大凶十二年
運。行四方とよみ。

ひとごめ 太白神と同一とよみ。ぬさかり神とよみ。しり。金葉集に
君とよみ。一むらり神とよみ。ひねとよみ。しり。たうらうん
ひとごめ 淮南子に「葉落而天下知秋」とよみ。注に「葉ハ梧桐」とよみ。

○藏玉集に「葉草」を桐とよみ。しり。
ひとごめ 舟と「葉」とよみ。韻會に「黃帝見浮葉以為舟」とよみ。しり。韓

退之も共没蒲湘一葉舟く作まら

ひふいとうけー 年中行事歌合寄御溝水壙

ふれはれ名もや立ぬへくれあかの一葉瓜うけく水くも此記

注しとらんこくよとみらよ詩と書てみる水と流し侍る事の因縁あるや
我國よとわさ乃葉よおれ心とくくくかりはれもはるもやとんえ
ころ

△ひな 邊鄙とらふ神代口訣は日奥乃義とらふ日本紀は靈夷と訓せ

り高日乃國よ對し天子乃まゝまぬおとらふて天さうふひをまつ
つけをく一説は日の下まゝ天子對して下國をらふとらふ○歌よひなを乃

わくれひふ乃長踏ひな乃けく野たもまあり○和名鈔は雜とよめりひ
ひなももつらひくと鳴きなすくくく靈異記よひふ乃こくくえく

爾雅よ生哺敵生嚼雜くも母乃哺とくくか燕雀乃類也自ら嚼を雜
雉乃類くとらふ新撰字鏡は鷄もよあり

ひなも 東鑑よ日次と書りひなへひの義日並知皇子尊まら○日次乃

贊とらふ内裡へ六齋日と除く乃外へ毎日鷹の鳥と奉くくよて禁野乃
名もあり西園寺鷹百首よ

百あれ日あくと賀をたてんくや片世の林も将た今今日

△○日次記は二百二十冊あり九條道長公より兼實公乃時までなる
ひなも 陽とらふ日乃方の名のか及なく倭名鈔郷名は陽田とよめり今姓よ

日向と義訓せり○野州朽木よてくくく日蔭とてくくくくか式
遠江國比奈多乃神社あり○伊勢安濃郡よひなを村ありて山川よ夫婦淵

くくか處とくくく長野城と土岐乃攻し時伏兵起りく土岐殺せんぬく云傳よ
こ仁木義長く長野城よ据しと土岐頼康依保氏頼乃攻する時乃るやて

ひなも 神代紀よ夷曲とよめり古事記よ夷振くとんえく官人よりと對する
詞く古今集乃近江く水笠よりも同一古今序注よえひすくくくくく

誤あるく○古事記よ夷振之上歌くもるも又夷振之片下也くもらる
ひなも 万葉集よ夷離くとくく天疎くもらいつまのよりくも同一く

ひふのまやこ 万葉集よりあり越中の國府とあり日本紀より東夷之中有日高見國
とありし語意同一リレハ何れの國とありしや

ひやうくまひ 朝日の出とありしやひやうくまひ邊鄙とありし詞より和名録より邊鄙
とありし訓より東方既白とありし如し

△ひまへ 遠近乃旅人今やたちわづらん東乃山乃ひまへとありしや
俗よ乞食とありし貧人の衣を非人の衣よりけり貧窮の家とひまへ

△ひまへ 俗よ乞食とありし貧人の衣を非人の衣よりけり貧窮の家とひまへ
とありし語意同一リレハ何れの國とありしや

△ひぬ 逸勢乃姓と非人と改めし伊豆に流せし子續後記よりありしや○聖德太子悲田院
とありし其郭外乃者非人と名くしありし

△ひね 和泉國より日根郡あり六帖より
らつてぬるひねの郡のしひとありしや

△ひね 武器より六狼筆とありしはぢとありしや○小鷹狩より馬上より鶉と
けく取物とありし

△ひね 源氏より白拈又担とありし引練の衣より下歌よりひねと出んといふ詞主仇

日記より入るより禪家乃公案と拈出すといふ意也とありしや○こよとひねの
撫へ○ちとひねの捫風とありし捫風とありしや○人壽草木ふと二年の

△ひね 終日又盡日とありし日目もふりてふ次略す今も日の目とありし語ハ
いふとれづといふのゆゑ同一又ひねもすかす乃略へ取もすかすは対し

詞人仁明天皇宝篋の賀歌より齒刺須終日須如良るとありしやひねの日く採ハ助語又
採も及乃く取をよといふがごとしすかすハ物乃未となりて尽んとするといふ詞人

△ひね 別名ハ事もつとものといふゆゑはまらとありしや噴とありしや
ひねとすといふも同一も及も大和物語乃歌也

△ひの 日野と書り近江乃所名より日本紀より遺野とありしや是れ○絹
よぬとの上野國乃邑名也○長谷部信連の流るるハ伯耆の國日野也○越

前日野川あり○获生氏の説より諸國より日野の名は火野の衣をて烽火
より出るとありしや倭名録より倭名録信濃國高井郡日野とありし

ひのえ 丙也火の兄乃義續日本紀賊盜律なり丙と景と作る西土の書も
もええと

ひのゝ 日祈儀あり儀式帳に日祈内人為惡風不吹祈申告が申進くとええと風
官と風日祈宮ともいふ風日祈の神事あり

ひのとも 日本とよめり万葉集にもええとをいふ誤りやうに詞もええと
とらる源氏とええ新古今集に成尋法師入唐侍りりる母乃讀侍りる
とゆと天の下とありとて照日の本はあはれとて

ひのくよ 肥前肥後汝ら景行紀に到火國日没夜冥不知着津道見火光非
人火故名其國曰火國といふ○大同聚類方に火國藥肥華北郡姫島直等家方而を
恭御宇養之元是少彦名神廟也といふ

ひのみこ 万葉集に日之皇子と書り日神の御裔なりとてかへり奉りる年中行事
歌合行幸の題に日乃り君ともいふ○日乃御孫日乃官日乃御門意皆同一

ひのたて 万葉集に日経とてえ日本紀に日経とてえと東西とらる

ひのおき 万葉集に日緯とてえ日本紀に日横とてえと南北とらる

ひのおほし 晝御座と書りごとと音もいふ清涼殿にあり平敷御座に

○別殿行幸に晝御座の御劔と持せらる也とのみ徒然まも出る

○百練抄に崇徳院の時晝御座劔失とらる又白骨のりともえ

ひのみつゝ 古語拾遺に日御綱とてえ注に今斯利久迷繩日影之像也

とてえと今熟田乃神輿石清水乃神幸と此物あり

ひのいろくよ 万葉集に日入國と所遺とてえ唐國と持る經籍後傳記に

日没處とてえと

ひのりつゝや 神代紀に日之少官とてえと

△ひご 檜葉乃義扁栢とらる朝鮮にあり唐にあり今津輕南郡より

出の檜も多くとてえと又らやばひとらる尾にありまのふとらる

○出雲國に伯伎國との界比波乃山古事記にて枕草紙にもひのひの山と

えと

くろり○上巳の雛提へて贖物の義也といふ源氏の君須磨に充遷り時三月巳の日陰陽師と召て被へさせぬしくく人形と舟に載て流し彼物語より一説は柔神祭の義ありといふ

△ひふ 盛衰記よりひふの上手と見えたり二の義とてはの幸くといふ○服よりひふあり被風と書りひいんといふ唐音之此物躰と黒く縁と白くあつて瓜鶴髻といふ也

△ひふ 倭名鏡より雨水俗よりひふと見えたり源氏物語よりいひて地のこととてわらむかりけひぬるといふ俗より音りて氷と見えたり是也長和二年三月雷鳴氷降大如梅とも見えたり○日振鳴の伊豫也純友が据る嶋也

△ひぼこ 神代紀より日矛と見え鏡といふ説は舊事記より百名に据る鏡とも見ゆ

△ひま 和名抄に隙とよめり日間の義より問もよめり○四声字苑に隙壁際孔也といふ又卻とよめり○源氏よりひまある御中といふ中乃の

と見え西土乃詞も同一に祓やのひまをいふをなかりける閨門乃隙のありむとらる

△ひま 日待の室所殿日記より十月十五日今夜御日待例年也といふ上世にかゝ中世に來密家道士の習合してわらふ事あり大かく一條院の御後佛事の盛んありてまふに神事もかく慈仁よりて朝廷に

ふに御事にて俗に異あるかやといふ近世西山公の日待月待も禁せさせり

△ひま 日本紀に隙駒といふ礼記に若駒之過隙然と見え

△ひま 源氏より氷水乃義和名鏡に膳夫経を引て氷漿を今按以氷入漿也といふの成り思乃俣の日記より氷水といふことありて○俗より乾水乃義

△ひま 日本紀に秋に復虫乃火虫乃衣といふ燈蛾といふ火採虫といふり○俗に豆の葉を甲虫といふ又和泉に上長也

乃日のゆゑに所定をほりわくひ乃かどろと云はるるに水とせき
く冬乃厚氷と収め置く六月一日ほり出く献ぐと云う○朝野群載に差
進氷事記せし神分料秋奠料關白殿下御料より官史生食所料より
又えく西土に伐氷之家より其條に氷長もるえと云う○山城葛野
郡に五處あり○東鑑に炎暑之節者召寄富士山之雪所為備珍物也と云え
る○ひむろくはる木の柏の類を志やしと稱するも同類なり○葦と氷室
まゝくふ藏玉集より云えり○氷室乃社に南都より祠後氷室乃址あ
り後成郷

春日野乃古く氷室乃わくそそ岩乃けし猶と冷しと

ひんづ 俗語に下水乃茶をひんづと云ふもひんづは技ふと云ふ

ひんづ 式法に大抵ふと云ふは同一鬢除はトよらふ腋つめの事也鬢かこま
二歳ふと云ふは五歳鬢かこま十六歳ふと云ふは二十歳鬢かこま女子は鬢かこ
ひ男子は衣服のひと云ふは万葉集に年のはせかこむる鬢のと云ふと云ふ
むかひ八歳の比よりと云ふ始よりと云ふと云ふ

△ひめ 姫字媛字はより日女の美女子は美称也師古に説く姫は周姓其女

貴千衆國之女所以婦人美稱皆称姫と云う○倭名抄に糰糰と云ふは非米の
音ありと云うつは物語にこころふと云ふはひめと云ふはと云ふは水飯也
と云うは松多紙と云ふはひめのぬきと云ふは書り今俗ひめのと云ふは三寶堂類
抄に糰糰とのりと云ふ是也○同書に鶴と訓せし伊豫風土記に鶴と云ふ

○侍中群要に昏下供御院称御比米と云

ひめ 源氏物語にひめ秘する名也と云う

ひめ 日本紀に命婦と云ふは延喜式に宮人と云ふは姫乃称也乃稱六位と云

ひめがき 神代紀に堞と云ふは姫堞の義也城上女堞也と注せし神堞と云ふは如

ひめがき 和名抄に糰糰ひめと訓し注に非米非糰之義也と云ふ糰糰云糰
米也類篇云煮米為糰廣韻云煮米多水也と云ふひめの下と云ふは饌差類
考曰糰糰は即平生所食の飯の類也古くは飯と稱するもの今の強飯是
也又曆家よひめと云ふはあり是は先公供しと云ふ也然と
異説と云ふ者あり用益かといふ

ひまらちさき 日本紀に内命婦とよめり ○枕草紙に行事のさうれひあ
まうち君とくえさるの公事根源よりひまらち也東堅に内侍司の被_レ臣_ニて
正月の女_レ叙位は叙爵とくふとりく 姫_ニ大夫_トといふやとら

△ひも 日本紀に帯倭名抄新撰字鏡に紐とよめり引結ぶ物ふれらふや俗に
ひちもといふ結紐長紐に日本紀にえさるの長紐と延喜式に尚紐ともえぬ
○通鑑晋紀注に今人謂條頭采為流蘇とえぬ條の物ひも也流蘇ひもの
先のふさ也

ひとの 栢捲といふ檜物の名徒然州にひとの木とええ盛衰記にひもの舟
とて栢の末つゝある舟とえさるの舟とえさるの舟とえさるの舟とえさるの舟
故合よえさる新撰六帖よ

近江あるひもは里の栢花とけらて折人しぬ
曲物とらるるは栢皮汎用と是とかいふ也ひとの里に日本紀に蒲生
郡遺_ト通野とえさる遺通といふひとといふふく_レ也 ○今俗ひとの
とらふ魚の乾_レ也煮腊とらふ

ひもろご 神代紀に神籬とよめり倭名抄にひかろごととえぬ叢祠といふとい
つる是神社の濫觸ふと_レ万葉集よ

神ふひよもろごといふといふといふといふといふといふといふといふといふ
○東鑑に將軍家被始行御神籬被陰陽少名親職奉社之とえぬ後世此事とら
かとも ○岳仁紀に熊神籬らり天日槍とよめり七物の内也是ハ珍の熊踏といふ
よや或は皮楯の表よや ○神供といふも同意也清輔家集よ

献_ニ昨_ニの釋奠の次乃日祭祀の供物と大学寮より内へまるとらふ也昨といふ
もろごといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふ
まら_レたといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふ
まら_レたといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふもろごといふ

○但馬よ山麓田中よ小一の森に_レ誰_レひとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
ひもろご 日本紀に七首と訓せり古事記に紐小刀とちり八雲御按よ又心とら
ひもろご

うしろふと見えたりかゝる貫之のすまじゆ

ひもかゞし 万葉集に紐鏡と云ふ紐刀の類也のこたれ山つづけに鏡の裏に紐
に常は着て解のい莫解との云也ふとのとをうららるる○氷面鏡の表もらる
藻塩まに鈴麻の漉とひもかゞしことなるに十瀬の波とらる

影清に岩間の水たふもかゞしとけてもまよひよりあか

△ひや 日本紀及宋史に火箭と見えたりに古弓りて射とらる後世にふとのとら
火器也とらる○石火箭大國火箭棒火箭炮火箭大筒鉄砲ふとのふらり全
浙兵制に手銃とひや鳥銃とたんとひや砲とらる譯せり○俗に化城とも
らる

ひやと 令冷のふ也○刀りて人と斬とらるも義同し轟字とよむに説文に轟
而切之為膾と見えたり

ひやうじ 火危の急語也源順夜行翁の狂歌に夜々警火舊府中呼曰火危彼誰
何と見えたり火用心のふらりとも

ひやふり 拍子とらる和名抄に百師の音にひやふり也神樂に拍子末拍子とらる

手拍子 笏拍子扇拍子とらる切韻に拍子打也と見え延喜式に擊百子と見え
えあゆみ拍子のひやと拍子の事也と体原抄に見えたり又半拍子とらる事たり
又間拍子○鞠とける足ぶと三拍子たり今俗に三拍子とらるは是感也
○關東に馬上して響けつとらるつとらるの音にひやふりと見えたり
とらる本とありてまゝとらる

ひやうとん 江次第に平文倚子平文高机たり是に白木机に胡粉とて盛るとの也
とらる延喜式に蔀繪案平文案と並に置上とらるぬ地面の平らなるより
とらるよも記録に平文持衣と見えたり禪問の抄に平文謂以白鴈彫唐花也
とらる

△ひゆ 冷とよまら氷雪の義倭名抄に冷酢とひらとゆきとらる○轟字も
同じ今にひらとらる詞也とらる○倭名抄に菓とよまら性冷の義にや東國にひ
やう津輕にひやうあど加賀にひやうとらる赤菓とあひゆとよまら漆色餅
よ入り馬齒莧とらるひゆとよまら相摸とらるぬひやうとらる今にひらとらる
ひや也加賀にひらとらるひやうとらる白菓の唐もひや也五色菓にひゆ也又まひ

ゆくら常のちゆや

△ひよ 鹿の音よらる丈木集

萩川つらみ 鹿の音よらる丈木集

ひよま 雞の雛よらる是もはさとりし成一松葉紙は雞のひよのひよ

かしまくくはてと見え神宮ひよの祭も意同

ひより 霽とらふ日依の義日方とらふ如一〇諺は天「太郎とらふ天」天上の朔

日八事次郎ま八事の二日め土用三即ハ土用の三日め寒四即ハ寒よ入四日め也ハ日雨

ふり出でハ天氣ちとらふ

ひより 十二支成らふ日讀の義也月神と月讀尊とまらるる物と数うす

とよむとらふ漢も同〇九そ十二支の名ハ十二肖はりてまらるる春風堂隨筆

よ今人以十二生肖配十二辰為人命所屬莫知所起と見え

ひよふ 身底記よひよんぬまといつ瓢の轉る詞成へ一尾張よ直よ瓢

とひよんといふ或ハ凶の詭言也といふ

ひよりといふ 平家物語よ狂紋とあり大双帯よ素襖よいらる今家紋の加ハ紋

とひよんといふといふハ表紋の字も物よつけ表とるといふといふ

物見よあるあまの車次といふは紋はてせると始るといふ〇家紋の起る

らつの時ふはあは晴陰日記よ菊紋と名てといふ事又えといふ今の定紋

の義は非中世武門盛あり一より幕の紋も家と分てハ是より始りて家々の

定紋となりと成ア一又秘文あり又通文といふ事死してハ唐花系といふ香葉

ふといふは紋た紋といふ誰さ者してと苦一むねといふりといふ

西土の花号よあてとら其幕の紋ハ推古紀ハ旗ハ繪くといふといふる瀛鵬

つと又宗五記といふ書よ公方様御服ハ織物よて色御紋不定白と綾又ハ

綾はむぎを地成色よ深く御紋紫ふといふといふ是ハ東山義政公時代の

事ハ御紋不定あるは足れハ其比ハ衣服ハ家紋ハ膠と何の紋もといふ

△ひら 平とよあり開く義也〇紋とよむも糸とよむも義同一落くハ物語

一ひらといふも紋ハかといふも糸ハ紙といふといふ又張とよむハ皮一張の類也〇

名ハ成とよむハ朝成ハ体源抄よ足少衛とよむハ平重衡といふ〇平門ハ扉

の上は横木をわくたるとなり○ひらの近江國へ躬恒集まらるるの山伐かして
かくてのまゝかきつゝのたまふれはちかぬとつゝよみぬてなり

ひらう 日本紀に平瓮とよみうらむの瓮の成座一式に或は水瓮と訓せり又平湯瓮
とあり新撰字鏡に昧とよみ考得と鏡もよみ倭名抄に盆とよみ平瓮も同
一唐韻に凡器也と見え今俗漆器に音とめて盆とよむもの其形の似て
る成しとて榮の属也○古來神官賢士師の居所と云ふし式に多氣郡宗神
社と見えゆとて大波のつとみうらむ今居か南に移り里人世記の故事より
て天平瓮と造りし今具形状と見えたり朝夕の御饌調進の土器と造り
たるもの○洪水より豊受宮正殿の下は天平瓮と漂はせし事鳥羽院の時よ
く百練抄に見えたり○住吉の神事預り女子よ公孫河平瓮より出る
事とらなり○ひらうの譽の出羽の平鹿郡より出る事とらなり新六帖
よよみう○平賀氏の東鑑よ見え元弘に護良親王に從て十津川に匿るは赤松律師
則祐村上義光平賀三郎也とて三條にけり

ひらう 日本紀に葉盤と云三代格に枚手と云倭名抄に葉手とよみうらむ式に空形葉

盤比良豆似笠形も見え今これ大嘗祭の茶手の栢葉成竹の針よみ孟の形も
く平く造りし秋に葉盤に栢葉に盛物也とらなり日中行事よ見えり見え
類聚雜要及今俗平盤と稱する物に此遺制ありとらなり出羽より平皿たりたり
とらなり下總奥州よ見えり○建武年中行事よひらうでこの御飯と
見えり

ひらう 開とよみうらむ及る昼より出る詞成り發と同一
ひらの 平野の社の四姓の氏神とて仁徳天皇とて祭り又舒明天皇也と
袋草紙よ見えり

ひらう 新波津よきこととせむむしれや平野の松よあまの白雪

二十二社次第第一今本神日本武尊源家氏神第二久度神仲哀天皇平家氏
神第三古閑神仁徳天皇高階氏神第四比賣神天照太神大江氏神第五縣神天
穗日命四姓氏神中原氏清原氏菅原氏秋篠氏見え祝詞よ今本久度
古閑のよを奉り閑に式よ開と作らるることと文徳實録江次第も皆
閑とて延喜格に延暦年中立伴社とて桓武の御父光仁天皇いさく奈

良の田村に坐して皇太子を立給りて其田村より今木大神宮崇め
 ともち也太政官式に平野祭桓武天皇後王及大江氏和氏并預見參延曆八
 年紀に皇太后姓和氏贈正一位繼之女也母贈後一位大枝朝臣之妹后先
 出自百濟武寧王之子純陀太子之少和氏の姓氏録諸の中より此より同
 一○久度に神名式に平群郡に知く今と久度村あり古關の事不詳處も
 同祝詞にも久度古關に一章に廿二社次第に据の五座也さう久度古關の
 一所に祭るるる台記に平野社司奏詣以縣神預官祀不許する也○内
 膳司よかま三ツあり一バハの一派忌火一は庭火金する也○元弘の皇軍赤坂
 城の守將に平野將監とせり

ひや 常の屋作りとらる盛衰記に平家と訓する是也

ひだ 新撰字鏡に艘とよみ倭名抄に船とよみ俗に用平田舟とらる平整
 ○殊の一種の壁錢ともあり平たき物也とらるるも○ひだも此釜
 へ松永久秀に環器也信貴城にて信長公のため攻られし時碎る棄るる
 と或へ平雲とらる○平田城に伊賀山田郡也平田入道平家継に据る所せし

三石平氏に弟家長も伊賀平内左衛門是也

ひび 日本紀に裙とらるるひびあひもるえさう平帯にたつらるる倭名抄に
 うみくともあり衣服令集解に故帯と又少男の袴の上は褶成さう故に俗に
 くらまはひびとらる

ひよ 俗に物と強詞とらる東鑑に成平所望十訓抄にひよかへ今昔物語
 にひよとゆゑてたへ盛衰記に平よとと真平にもるえ太平記に平よ憑むと
 らるひよの平懐の意も又省免とせらるる平等の義あり
 くら成とらるるもまろひもらるる

ひやく 源氏に神ありあくとみ少日本紀に其雷融とてのわひかりひらめよ
 とよあり或の閃とよあり著聞集に講してひやくかんと時とらるる聴衆の立ちあはる
 ふれい西土に懸閃ふらるる如く念音閃註に群魚驚散良くらる水中忽有忽無
 のさまねき魚の網ふらるる恐とらるるひやくの念字より閃に門中より人あつて或の
 又ええええの意也

ひろまき 三代實錄に充壹此島曹并平纏各二百具とみゆ甲の敷あり

ひらき 大嘗祭より高橋氏の文に枚次とありひらきでありといふ

ひらぶがし 古事記より貝の名也日本紀より比羅夫といふ人の名多し是か

ひらや 古事記より後田毘古神澳より一して比良夫貝より其手成亦合ふ

と見ゆ今昔物語より猿大なる溝貝を取んとせしに多しといふ事成載

より戦國策にひらきとあるは事同日の談也

△ひら 宇治拾遺に蛇出てひらきとありてはぬと云ひひらきと

ひらつとも俗よつひらきと云ひつゝふらひつゝふらひつゝ

ひらき 虫薬也魚膽に如薬といふ物也といふ玉画方の覺樹藍也といふ

さうたといふ所よりと云ふ

△ひる 神代紀より日とあり昼も同じ日と云ふ詞也又日中と

ていつ伊勢物語より日と云ふ武備志より午と云ふ是也○乾といふ神代紀

涸もよめり晝より出たりと後撰集より袖のひるよりあり二意といふ

又かゝり及ひ也童蒙頌韻より晞もよめり○蒜とよむ味のひらきと云ふ

今俗蒜と呼其臭に似りて也○明法博士中原範政云師説蒜之忌魚無日

限以臭香失可為其限者為家之傳説自以為故實然則以臭失之時可從

清淨事欽○門首に蒜をゆけて疫邪と云ふ事日本武尊に故事より起

り日本紀よりくへい○民間土用の入る蒜と水とてのむく源氏より六月の

ひらき又ぐねらけと云ふやくばくすと云ふ事いふ事此草極熱乃草

薬といふ蒜とせり東鑑より御服薬蒜と云ふ事宇治物語より風たけり

蒜と食てくええと云ふ○倭名抄より蒜類といふ事と訓せりさきの製の成也又

大蒜杉かひる小蒜ゆひる獨子蒜ひつゝ澤蒜ゆびると云ふ事又新撰

字鏡より白芒と馬びると云ふ事今も嶋蒜ありあつた也○新撰字鏡より

ひらきとよめり字心得より一万葉集よりひらきと云ふ事と云ふ事是也西土

よりも薤白といふ事○水蛭といふは蛭より名を得たりと云ふ事馬

蛭也かひる事○土蠶也といふ山びると云ふは山より多し能人と恠

と稍より居る事○木蛭草蛭といふ事石より砂と云ふ事石蛭より儀式

帳より田蛭といふ事○蛭小島は豆州也源頼朝の謫す事一地也文覚の配所

ふこやと近し○蜂の子といふ事と云ふ事蜂也蠶も同じ○箕より物といふ

ひろふくらふ皆其物所採ふて振物の名也又古事記に振波比礼切浪比礼
ふくると同しとて衣服の事なる一〇ひろきる嶺は万葉集よる肥前國
松浦郡あり又新後拾遺よるゆの石見國美濃郡にゆの高角山とよみ
合まらり日本紀に大葉子ひろきるを致よる万葉集よる佐用姫
の事よる古外國うく終る一〇の領巾は振く其魂は招き一故實の
事よるや鎮魂祭の意よ近し

△ひろ 神代紀に尋とよみ開くを如く一太戴禮よ舒肱知尋とよる生
生論注よ里舍間人不竹間徒横長短両手臂為尋とよる今もあまの
て物とよるはひろきる一〇楊子方言よ自関以西凡物長謂之尋もらる
〇名よ原巨識とひろきる一〇万葉集よ舟の事よるせんひろとよる
るも尋の義よ

ひろし 廣とらふ尋とる意也弘も同しまみむめ又かきくけとて用らけり〇
新撰字鏡に衍とひろきる一〇廣の義と同し
ひろふ 古事記に撥とよみ新撰字鏡に拈とよみ常よ拾とよみ又撥とよみ

廣くこれの意也算家よひろしとらふ保法也〇万葉集よひろしとらふ
てゆふこととゆひろふの古言よる一〇今俗女とひろしとらふ禮記に拾級聚足
とも

ひろめ 倭名鈔よ昆布とよみ今音と呼て一名えびとめとよるは蝦夷島より出
たりて也水戸の海に昆布は義公より始ふ〇俗に祝賀の物とらふ廣めの
名よよみらるの一と名同し音よよみらるの義とらふ後の事也とらふ

ひろがこ 神代紀よ廣牙とよる古事記のひろきは梓也ともらる
ひろがこ 日本紀に飄とよみひろがこ一〇意通つ新撰字鏡に八咫とひろがこよ

△ひろ 枕子紙よるえ山家集よる鴨字の篇海に昆鳥也とみゆひろしとらふ
弱き意よる二合の意よる也〇ひろかまひろもひろ小也一〇ひろも小也頭上
真紅也ぬひろしと至小也たてひろし所よ青黄也かひろし大也とらふ〇漆色よ
と茶色の醬色もひろしとらふ

ひろが 源氏よる也匹弼の意よらる或は婿人とひろがひろしとらふ

△ひね

△ひな

△ひおき

日本紀の日置部は諸國の日置と云ふ所おほく延喜式に云出雲國置内
外日置田二町と云ひ出雲風土記に日置郷云日置伴部等所遺來宿傳而為政之所
故云日置郷と云も

ひおかり

俗に曾祖父と云う又ひぢいとも云ふ○ひぢい曾祖母也曾といふは
ひ重なる意也

ひをど

鎧といふ火威と書り又緋甲の字北齊書に云えりあけの革よく威せる
盲今鏡に云えり源仲細宇治川の軍よめる歌

いせ武者の皆ひをどこれ鎧とてうち綱代よかてける哉

氷魚の寄り伊勢の武者のひをどをいふは日神鎮坐の地なるゆゑ成て
氷魚よ紅葉と鋪らふ故實と信らるる盛衰記に初五と云ふちんた
と云えり文と伊勢國の住人古市の白子黨と云り古市八渡會郡あり白
子の菴藝郡あり古市の伊藤五伊藤六平治物語に云えり平家物語の日野の

十郎と三重郡の日野村あり伊勢平氏と云ふ平家物語に云え伊勢國三日平
氏と云ふ平家の東鑑に云えり

倭訓栞前編二十五終

一

二

[Faint, illegible text within a rectangular border]



